

歴史認識をめぐる問題は、ときに政治的対立を激化させる要因となる。21世紀に入っても、植民地統治や戦時の出来事の認識をめぐって、日本は各国と政治的緊張・緩和のプロセスを繰り返している。私が英国留学中に会った東アジア諸国出身学生との交友でも、この問題はデリケートなトピックであり続け、親密になるほどこうした話題を避ける心理が互いに働いたことを告白しなければならぬ。かように、「歴史」という観念は人間の情念をかきたて、その思考と行為に影を落とすのである。

悲観的側面ばかりが目立つ昨今の「歴史」の観念だが、20世紀イギリスの哲学者R・G・コリングウッドのヴィジョンは楽観的である。若き日に彼は、「歴史的精神」の最も顕著な特徴を「自らが拒絶する異質な(政治・社会・文化などの)体系によって生きる人びとを賞賛し愛することのできる能力」としての「寛容」に見出していた。彼のこの「歴史」の観念はいかなる思想的源泉に発しているのか——これが私の博士論文の関心であった。

R・G・コリングウッドと「寛容」としての歴史の精神 春日潤一

哲学史における彼への評価は、皮肉にもまさに「異質な体系」同士の不寛容の産物といえなくもない。20世紀初頭のイギリス哲学は、ラッセルやムアらに端を発する分析哲学が、19世紀末の観念論学派を駆逐し主流化する過程だというのが、20世紀中葉以降の通説的理解であった。この見方からすればコリングウッドは、単に時代遅れの観念論者と閑却されがちであった。この通説に対し私の論文では、彼の思想形成期の「実在論・観念論」両派の間の論争に注目し、彼の哲学が、そのどちらの追従でもなく、両者の立場の克服を目指して構築されたものであることを示した。

人間の思想や行為はそれが置かれる歴史的文脈によってまったく異なる姿を見せるといふコリングウッドの歴史哲学は、現代の政治哲学にも少なからず靈感を与え続けている。人間の政治的営みにおける「歴史」をめぐる対立を「寛容」へと転化するために、彼の哲学がいかなる含意を持ちうるのか——さらなる探究を期したい。

(かすが じゅんいち／東洋哲学研究所委嘱研究員)